

令和三年度 横須賀市立田浦中学校

第一学年 学年末テスト

令和四年二月十八日(金)実施

Ⅱ 国 語

- 教科書
P.117～ 竹取物語
P.158～ それだけでいい
P.202～ 少年の日の思い出
○教科書(書写)
P.14～31
○文法
1年生で習った範囲
○漢字ワーク P.52～65 (25～31)
○応用問題
説明文

1 はじめのチャイムが鳴ったら冊子を開き、ページを確認して問題を解き始めてください。

2 わからない問題にこだわらず、できる問題から解きましょう。

3 解答は、解答欄に丁寧に記入してください。

4 指示がなくても漢字で答えるようにしましょう。

5 解答用紙にマス目がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

6 問題文を最後までよく読み、答え方に気をつけて解答しましょう。

7 文字は濃く大きく書き、句読点も書く場合は、分かるように書いてください。読めない文字や汚い文字は採点しません。

8 二度書きをせず、消しゴムも気を付けて使用しましょう。

9 終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに筆記具を置いてください。

一年	組	番	氏名

問一 次の問いに答えなさい。(20)

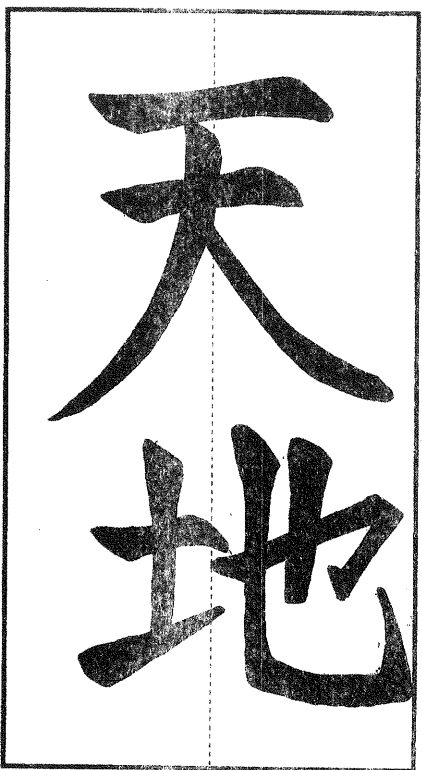
【知・技】

- (ア) 次の1～4の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。
- 1 賓客をもてなす。
 - 2 日本古来の謡曲。
 - 3 幸福の絶頂。
 - 4 黄金色に光る。
 - 5 手綱をしめる。
- 6 法を遵守する。
- 7 包丁を研ぐ。
- 8 收拾がつかない。
- 9 元旦を迎える。
- 10 荒野をさまよう。
- (イ) 次の1～4の各文中の——線部を漢字に直しなさい。必要なら送り仮名も書くこと。
- 1 センモン知識の習得。
 - 2 コウゲキを受ける。
 - 3 切れ味がにぶい。
 - 4 カンだかい声を出す。
 - 5 たみの声を聞く。
 - 6 キゲンが悪い。
 - 7 コウガな暮らし。
 - 8 かわいた大地。
 - 9 セイギの味方。
 - 10 カンペキに暗記する。

問二 次の問いに答えなさい。(8)

- (ア) 左の作品は、「天地」の書き初めの練習である。清書に向けて、完成度を上げたいと思っている。より整った字にするにはどのようなことを意識すべきか。字形と筆使いの二点に触れてアドバイスをしなさい。
- 【思・判表】
- (イ) 読みやすい字を書くためのポイントとして正しいものをすべて選び、番号で答えなさい。
- 【知・技】
- 1 用紙に合った文字の大きさを考え、仮名や画数の少ない漢字は大きめに書くことよい。
 - 2 字の大きさはできるだけそろえることで字間が整い、すっきりとした印象になる。
 - 3 縦書きのときは、上から下に字の流れがつながるように、中心をそろえることを意識すべきだ。
 - 4 行が複数になるときは、行間を詰めるとコンパクトに収まり、まとまった印象を受ける。
 - 5 書き出しの位置を大切にし、用紙の上下左右に余白を取ることで余裕のある文字の配列が実現する。

〈練習〉



①

〈お手本〉



問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(12)

(ア) 次の文について、正しく文節と単語に区切られているものをすべて選び、番号で答えなさい。

※文節は／、単語は一で区切っています。

- 1 休日一は／山一で／キャンプ一を／してみる。
- 2 正義一の／ため一に／戦う。
- 3 有名な／演奏家一が／来る／らしい。
- 4 あたたく／広い／心を／持つ／ため一に／周りを／見て／みる。
- 5 この／スポーツ一は／みんな一で／できる一から／楽しい。

(イ) 線部の文の成分をあとの選択肢から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 真つ赤な太陽が沈む砂漠。
- b さわやかな風が吹いてきた。
- c 明日はきつといい日になる。

1	主語	2	述語	3	修飾語	4	接統語	5	独立語
6	主部	7	述部	8	修飾部	9	接統部	10	独立部

(ウ) 線部の単語の品詞名をあとの選択肢から一つずつ選び、番号で答えなさい。※同じ番号を二回使ってもよい。

- a 深呼吸は大きく息を吸って吐くことが大切。
- b 得意な競技を分かりやすく教えるのは難しい。
- c 鳥になって海を越える。そんな夢を見た。
- d リズムに合わせてみんなで跳ぶと楽しい。
- e 仲間の意見を尊重しつつ自分の考えをはっきりと言う。
- f 声かけをしようという心がけが何よりもうれしい。

1	名詞	2	連体詞	3	接統詞	4	形容動詞	5	形容詞
6	助詞	7	感動詞	8	助動詞	9	副詞	10	動詞

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(23)

(ア) 反復として用いられている言葉を「五」字で本文から抜き出さなさい。

(イ) 線①②③「いつも見えている……」「いつも輝いている……」「いつも」

【知・技】

そこにある……」について、その理由として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【思・判・表】

1 山や海や星は、普段の生活であまり自分に関係がないので、たまに見るくらいでちょうどよいものだから。

2 山や海や星は、自分に対して何かをしなくても、存在するだけで安らぎや勇気を与えてくれるものだから。

3 山や海や星は、自分が見たいときに見に行くものであり、普段の生活でいつも目に入ると邪魔になるから。

4 山や海や星は、自分にとってかけがえのないものであり、それなしでは生きていけないほどに大切なものだから。

(ウ) 「五」には「泳ぐ」という言葉を使った表現が入る。適切な形に直して解答欄に合うように書きなさい。

【知・技】

(エ) 線④⑤「信する」「信じつづける」について、「心」から感じとれる作者の思いとして最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【思・判・表】

1 確かに信じるという思い。

2 ひっそりと信じる思い。

3 何とか信じたいという思い。

③

4 本当は信じられないという思い。

【知・技】

(オ) この詩の特徴を説明した文として適切でないものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 各連に異なる表現技法を用いることで、それぞれの連で伝えたいことが強調できるようにしている。

2 表現技法が同じ連を並べることでリズム感を出し、行構成に変化をつけて、思いを伝える力を強くしている。

3 詩の題名である言葉を一行だけ第五連にもつてくることで、効果的に読者に思いを伝えている。

(カ) 描かれているものを順に追っていくと、詩の世界が広がり、内容も理解しやすいようになっていく。

【知・技】

次の各文に使われている表現技法をあとの選択肢からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a 太陽のようにあたたかく輝き続ける存在でいたい。

b 砂浜にぼつんと忘れ去られた麦わら帽子。

c 出かけよう、砂漠捨てて。

- | | | | |
|------|------|--------|-------|
| 1 反復 | 2 倒置 | 3 対句 | 4 擬人法 |
| 5 直喩 | 6 隠喩 | 7 体言止め | |

それだけでいい

杉 みき子

山は

そこに見えているだけでいい

冬は純白の

夏はみどりの頂が

遠い遠い空のはてに

①いつも見えているだけでいい

海は

そこに輝いているだけでいい

白い船を

X

かもめの群を遊ばせ

長い長い道のはてに

②いつも輝いているだけでいい

星は

そこにあるだけでいい

雲に覆われるときも

雨に隠されるときも

③いつも確かにそこにあって

わかってはいるだけでいい

希望は

心にあるだけでいい

目には見えなくても

手にはとぐかなくても

希望というものが

この世にあることを④信する

⑤信じつづける

問五 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(22)

一 今は昔、①竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、②いとうつくしうてあたり。

略

三 姫の美しきはたちまち都に知れわたり、多くの男性が求婚した。中に、夜昼となく、雪が降り氷が張る日も、また、雷が鳴ろうがやってくる貴公子が五人いた。その熱心さに、翁は姫に結婚を勧めるのだった。姫は断りきれず、その条件に、それぞれに望みの品を提示することにした。「仏の御石の鉢」、「蓬萊の玉の枝」、「火鼠の皮衣」、「竜の首の玉」、「燕の子安貝」……どれもこれも③この世に存在しないものばかりだった。

その一人、「玉の枝」を要求されたくちの皇子は、策略に秀でた人だった……玉の枝を取りにいくのだと言いつらし、実は身を隠し、職人を集めて作らせた。そして、しばらくしてから、「命がけで見つけてきました。」と持参した。

それには、「たとえ命を落としたとしても、玉の枝を手に入れば帰らなかつたでしょう。」という歌がついていた。

皇子は冒険談を得意げに翁に語る。奥で聞いていた姫は、「親の勧めを一方的に拒むのはどうかと思い、わざとあんな要求をしたのに……。」と悔しく思った。

そこへ突然、男が六人連れだつてやつてきた。そのうちの一人が、棒の先に文を挟んで差し出し、「玉の枝を作るため、千日以上も働いたのに、まだ手当をもらっていない。どうにかしてほしい。」と訴えた。

姫はほつと胸をなで下ろし、「本当の玉の枝かと思つたら、言葉で飾つた偽りの玉の枝だったのね。」と歌を添えて玉の枝をつき返した。

くちもちの皇子以外の四人の貴公子たちも、また、誰一人姫の望みの品を手に入れることができず、求婚は全て失敗に終わった。

略

四 八月十五日、帝は二千人の兵を翁の家に派遣した。兵士は、「こうもり一匹でも飛んだら射落としてやる。」と、血氣盛んだ。姫は塗籠の中で姫を抱き、翁は錠を下ろしてその前に座る。

夜十二時頃、辺りが急に昼のような明るさになった。

五 大空より、人、雲に乗りて下りきて、土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。

内外なる人の心ども、物におそはれたるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。

やっと氣を取り直して、弓矢を取ろうとしても、手に力が入らず、ぐったりとしてしまう。氣丈な者が力をこめて矢を射ようとするが、見当違いの方向に飛んでしまう。誰も彼も心はうつろになつて、天人の一行を見守るばかり。天人たちはすばらしい衣装を着て、飛ぶ車を一つ伴っていた。それを屋根の上に寄せて、家に向かつて姫を呼ぶと、戸も格子も自然に開き、姫は外に出してしまうのだった。

心乱れ泣き伏す翁と姫に姫は心をいため、手紙を書き置いた。

六 過ぎ別れぬること、返す返す本意なくこそおぼえはべれ。脱ぎ置く衣を形見と見たまへ。

月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ。七 見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する。

略

中将取りつれば、④ふと天の羽衣うち着せてまつれば、翁を、「いとほし、かなし。」とおぼしめることも失せぬ。

この衣着つる人は物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、登りぬ。

そのち、翁・姫、血の涙を流して感へど、かひなし。

翁と姫は、傍らの人が姫の手紙を読んで聞かせても、「なんのために命を惜しむのか。誰のために命を惜しむのか。もう何も意味がない。」と言い、薬も飲まず、そのまま病床にふせつてしまつた。

頭中将は、薬と手紙を帝に献上した。帝は深く悲しみ、ただ「⑨どの山が天に近いか。」とお尋ねになる。お仕えしている人が「駿河の国にある山です。」とお答えるのを帝が聞かれ、歌を詠んだ。

「再び姫に会う望みも消え、悲しみの涙の海に浮かぶ私には、不死の薬などいったいなんになろう！」

この歌をこの山の頂上で不死の薬とともに燃やすように命じられた。命令を受け、多くの兵士がこの山に登った。それでこの山を土に富む山、富士の山（不死の山）というようになったのだ。

頂から吐き出される煙は、今もなお雲の中に立ち上るのだと人々は伝えている。

(ア) 線①「竹取の翁」と同一人物を示す言葉を本文中から五字で抜き出しなさい。 【思・判・表】

(イ) 線②「いとうつくしうてあたり」について、次の問いに答えなさい。 【知・技】

a 現代仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。

b 現代語の意味を書きなさい。

(ウ) 線③「この世に存在しないもの」を要求した理由として最も適切なものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。次の問題に答えなさい。 【思・判・表】

1 自分のために何でもする貴公子たちを利用して、珍しいものを手に入れたかったから。

2 育ててくれた翁に恩返しするために、最も財力のある貴公子を選びたかったから。

3 自分への愛情を確かめるために、貴公子たちに困難に立ち向かってほしかったから。

4 自分には結婚する意思がないので、貴公子たちにあきらめてほしかったから。

(エ) 線④「八月十五日」について、この日に見える月は特別な月とされている。その名称を書きなさい。 【知・技】

(オ) 線⑤「大空より、人、雲に乗りて下りきて」について、天人たちが現れたときの兵士たちの状態として適切でないものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。 【思・判・表】

1 物の怪に取りつかれたように、戦意が失われてしまった。 2 手に力が入らなくなり、ぐったりしてしまった。

3 矢を射ようとするが、見当違いの方向に飛んでしまった。 4 戦えずに心うつろになって寝てしまった。

(カ) 線⑥「過ぎ別れぬこと、返す返す本意なく、こおぼえはべれ」について、この文には強調の表現である係り結びが用いられている。結びの関係にある部分を二字と三字で抜き出しなさい。 【知・技】

(キ) 線⑦「見捨てたてまつりて」は誰の行動か、最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。 【知・技】

1 翁と姫 2 かぐや姫 3 帝 4 天人たち

(ク) 線⑧「ふと天の羽衣うち着せたてまつれば」について、これによって誰がどのようなようになったか、最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。 【思・判・表】

1 中将が翁をかわいそうだと思わなくなった。 2 天人が翁とかぐや姫を気の毒だと思わなくなった。

3 かぐや姫が翁をかわいそうだと思わなくなった。 4 翁がかぐや姫を失っても悲しいと思わなくなった。

(ケ) 線⑨「どの山が天に近いか」について、このように帝が聞いた理由を解答欄に入るように、簡潔に答えなさい。 【思・判・表】

問六 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。(22)

僕の両親は立派な道具なんかくれなかったから、僕は自分の収集を、古い潰れたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。瓶の栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼りつけ、ピンをそれに留めた。こうした箱の潰れた壁の間に、僕は自分の宝物をしまっていた。初めのうち、僕は自分の収集を喜んでたが、仲間に見せたが、他の者はガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼った飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。あるとき、僕は、僕らのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いたときに、得意の余り、せめて隣の子供にだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、①非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。それは子供としては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかれて継ぎ合わすという、非常に珍しい技術に心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、②僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニビぐらいの現金の値うちはある、と値づみした。しかしそれから、彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。僕はその欠点を大したものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。

③それで僕は二度と彼に獲物を見せなかった。

略

せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが、収集をしまっている二つの大きな箱を手にとった。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。果たしてそこにあった。とび色のピロードの羽を細長い紙きれにはりのばされて、クジャクヤママユは展翅板に留められていた。僕はその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを残らず、間近から眺めた。あいにくあの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、ピンを抜いた。すると、④四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望を感じて、僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕は針をそつと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形はくずれなかった。僕はそれをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。そのときさしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、僕は階段を降りた。そのときだ。下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に⑤僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、だいそれた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれちがってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このチョウを持っていることはできない、持っていてはならない、元に戻して、できるなら何事もなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分ののちにはまたエーミールの部屋の中に立っていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸が起ったかということを知った。そして泣かんばかりだった。クジャクヤママユは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽ははなはなになっでいて、⑥繕うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、⑦僕の心を苦しめた。微妙な

とび色がかつた羽の粉が、自分の指にくっついているのを、僕は見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰掛けていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起した。母は驚き悲しんだが、既にこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとってつらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに、行かねばなりません。」と母はきつぱりと言った。

「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っているもののうちから、どれかをうめ合わせによりぬいてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、他の友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼が僕の言うことをわかつてくれないし、恐らく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もって、はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがクジャクヤマユをだいなしにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、と語った。僕はそのチョウを見せられ頼んだ。二人は上上がった。彼はろうそくをつけた。僕はだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繒うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだと言い、詳しく話し説明しようと試みた。

すると、エーミールは激したり、僕をどなりつけたりなどとはしないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けつこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることもできたよ。」と言った。

その瞬間、僕はすんでのところ⑧あいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのよう、冷然と、正義を盾に、あなどるように、僕の前に立つていた。彼は罵りやえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

そのとき初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根ほり葉ほり聞こうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、床にお入り、と言われた僕にとってはもう遅い時刻だった。だが、その前に僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そして⑨チョウを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまつた。

(ア) 線①「非の打ちどころがない」について、次の問いに答えなさい。

【思・判表】

a 「非の打ちどころがない」「ことを「僕」が「悪徳」と言っている理由として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 大人がいなくて失敗ばかりしていたから。
- 2 子どもらしい欠点を感じられず気味が悪いから。
- 3 隣に住んでいるのに遊んでくれなかったから。
- 4 他の子どもたちより話す機会が少なかったから。

b 「僕」はこの少年のことを何と言いついてあるか。漢字四字で本文中から書き抜きなさい。

(イ) 線②「僕は妬み、嘆息しながら彼を憎んでいた」について、「僕はエーミールをどのように思っているか。

最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【思・判表】

- 1 長所は知っているが、素直に素晴らしいと認められない。
- 2 長所がわからないので、みんなが彼を褒めるのが許せない。
- 3 チョウの収集の貴重さは認めるが、美しさが無い。
- 4 チョウの知識は認めるが、人間としては自分の方が上だ。

(ウ) 線③「それで僕は二度と彼に獲物を見せなかった」について、その理由を「難癖」「獲物」という言葉を使って、三十文字以内で書きなさい。

【思・判・表】

(エ) 線④「四つの大きな…」について、表現の効果を説明した文として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【知・技】

- 1 直喩が用いられ、チョウの斑点がいかにも人間の目に似ているのかということを印象づける。
- 2 擬人法が用いられ、「僕」が斑点に魅入られたように引きつけられていることを印象づける。
- 3 体言止めが用いられ、エーミールの展翅技術がいかにも高いものなのかということに印象づける。
- 4 倒置が用いられ、「僕」が斑点の力強さにひるみ、おびえはじめていることを印象づける。

(オ) 線⑤「僕の良心は目覚めた」について、その後の「僕」の気持ちの変化として正しくなるように、あとの各文を並び変え、番号で答えなさい。

【思・判・表】

- 1 見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われる不安。
- 2 だいそれた恥ずべきことをしたという冷たい気持ち。
- 3 お手伝いさんとすれちがいながらびくびくする気持ち。
- 4 どきどきして落ち着きを失い、自分自身におびえる気持ち。

(カ) 線⑥「繕う」について、本文での意味として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【知・技】

- 1 破れたり壊れたりしている所をなおす。
- 2 病氣や傷を治療する。手当てする。
- 3 見ておかしくないように外見を整える。
- 4 失敗などがわからないようにうわべを整える。

(キ) 線⑦「僕の心を苦しめた」について、このときの「僕」の気持ちを説明したものとして最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【思・判・表】

- 1 チョウをさなぎからかえしたエーミールの気持ちを思いやって、心から悔やんでいた。
- 2 チョウを繒つために苦勞しなければならぬエーミールをかわいそうだと感じていた。
- 3 他の友だちからエーミールのチョウを見る機会を奪ってしまい申し訳なく思っていた。
- 4 美しく珍しいチョウを失ってしまったことが何よりも重大で悲しいことだと思っていた。

(ク) 線⑧「あいつの喉笛に飛びかかるところだった」について、その理由を説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出し、文を完成させなさい。

【思・判・表】

エーミールは、チョウを愛する「僕」の気持ちを理解しようともせず、「僕」を a (二字) と決めつけて b (二字) したから。

(ケ) 線⑨「チョウを一つ一つ取り出し、指でいかに押し潰していった」について、その理由として適するものをあとの選択肢から二つ選び、その番号を答えなさい。

【思・判・表】

- 1 今度こそエーミールに自慢できるようなチョウを集めて見返してやろうと決意したから。
- 2 貧弱でみすぼらしい収集しか持っていないことがみじめでたまらず見たくもなかったから。
- 3 苦々しい出来事を引き起こしたチョウへの思いを自分の中で断ち切りたいと思ったから。
- 4 クジヤクヤマム以外のチョウはどんなに集めても価値がないのだと改めて知ったから。
- 5 取り返しがつかないことをしてしまった重大さを胸に刻み自分を罰したいと思ったから。

問七 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。(10)

今、われわれは家を「一軒二軒」と数えるが、昔は「ひとへ、ふたへ」と数えた。この「へ」とは、かまどのことだ。多少年配の人は「へついつい」という言葉をこぞ存じだろう。その「へ」である。要するに、釜を置いて下から火を燃やす、あの場所のことだ。今のガスレンジに当たる。

ガス台で家を数えるとなると、ガス台が一家に二台あつては困る。

それほどに①昔は必ず、一家にかまどは一つだった。なぜか。昔は、家の中心に火を焚く場所を置いて、一つの建物が造られたからだ。竪穴式の住居などを見た人は思い当たるだろう。

それがやがていろいろに変化する。日常生活の団欒(だんらん)は、いろいろを囲んで行われた。いろいろのまわりに、主人の座る場所、妻の座る場所が、それぞれきちんと決められている。

農家のいろりはずいぶん長く続いたが、商家などになると、いろりはなくなる。なくなったが、テレビや映画の時代劇を見てみると、一家のあるじは必ず長火鉢の後ろに座っているではないか。つまり、②生活の中心は長く長く、どんなところでも火であつた。

だからこそ、「伝統の火を消さない」などという言葉も生まれた。そして、この生活習慣はヨーロッパでも同じで、古い家屋が暖炉を中心にした居間を持つことを知る人も多いだろう。

X 「昨今の日本家屋は、いろいろも長火鉢も、もちろん暖炉もない。火を燃やす場所は、調理する一隅へと敗退し、余儀なくされた。つまり、火は煮炊きの手段だけとなり、生活の中心を象徴する機能を失った。③今や、火は神聖なものだ、と言っても大半の人はピンとこないだろう。わずかな人が「そう言えばオリンピックのとき、聖火って言うなあ」というばかりではないか。

火が神聖であるゆえんは、火がおそろしいものである点にもあるが、火が燃料だけでなく、闇を照らすものである点にもあつた。

私ごとになるが、学生時代、伊豆の天城山中であちこちのわさび田を作る人たちが、夜になるといつしよに寝る小屋に、一晩とめてもらつたことがあつた。仲間三人、伊豆を無銭旅行していたときのことである。わさび作りの人々は、いろりにほだ(木の切れはし)をくべて、宵のうち、ひとしきり歓談をする。火がみな顔を照らし出す。そして、ほだが燃えつぎると、世界は漆黒の闇となる。

火が灯りであることを、このとき以上に実感したことはない。ところが、灯りである火の役目は、電灯の出現によって、とって代わられた。以後、火は燃料としてのみ見なされ、ガスレンジにだけ存在することとなった。

こうなると、火は一か所と限らない。「二世帯用に台所を別にした」という建売住宅の広告を見たとき、何千年か続いた、火を中心とするすまいが、ついに終わったと、私はひとり感慨(身にしみて感じる)ことにふけたことだった。

(中西進「日本人の忘れもの」より)

(ア) 線①「昔は必ず、一家にかまどは一つだった」について、その理由として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。

【思判表】

- 1 かまどを中心に置いて、一軒の家が建てられていたから。
 - 2 かまどのまわりは、その家の主人が座る場所だったから。
 - 3 一軒の家にかまどがたくさんあると調理しづらから。
 - 4 家族の団欒はかまどのまわりで行うと決まっていたから。
- (イ) 線②「生活の中心は長く長く、どんなところでも火であつた」について、このような「火」の働きをどのように表現しているか。文章の中から十二字で抜き出し、はじめとおわりの三字を書きなさい。

【思判表】

(ウ) X に当てはまる接続詞として最も適するものをあとの選択肢から一つ選び、その番号を答えなさい。【知技】

- 1 だから
- 2 そのうえ
- 3 ところが
- 4 あるいは

(エ) 線④「今や、火は神聖なものだ、と言っても大半の人はピンとこないだろう。」について、そのように筆者が考える理由を説明した次の文の空欄に適切な言葉を入れ、文を完成させなさい。

【思判表】

a(五字) によって、今では b(五字) ための灯りであるという火の役目が失われたから。

(オ) 筆者の主張を端的に表している言葉を文章の中から十八字で抜き出し、はじめとおわりの三字を書きなさい。

【思判表】

模範解答

一年
組
番
氏名

一		二	
(イ)	(ア)	(イ)	(ア)
6 機嫌	1 専門	6 ひんきやく	1 ひんきやく
7 優雅	2 攻撃	7 とぐ	2 ようきよく
8 乾いた	3 鈍い	8 しゅうしゅう	3 ぜったう
9 正義	4 甲高い	9 がんたん	4 こがね
10 完璧	5 民	10 こうや	5 たづな

知技		56
風刺表		44
主体的		10
		20
		0

三

(イ) 3, 5

(ア) ③ 字形：中心、外形、左右の粗々立て、点画の方向など
筆使い：横画、縦画、折れ、払い、曲がりなど

三	(ウ)	(ア)
a	2, 3, 5	
b	4	
c	2	a
d	1	b
e	9	c
f	10	3

四	(ウ)	(ア)
a	1	だけ
b	5	いい
c	7	2
d	2	白い船を
e		泳がせ
f		1

五

(ウ) だぬきの造
(ア) いたうつくしゅうていたり

(イ) 中秋の名月
(ア) 4
(ウ) こそはべれ
(イ) 2
(ウ) 3
(ウ) 4

(イ) かぐや姫がいる月に近い場所だから。

六	(ウ)	(ア)
a	2	獲物
b	1	難癖
c	2	模範少年
d	3	1
e	4	喜び
f	5	かなり
g		傷つけられたから。

七	(ウ)	(ア)
a	1	電灯
b	はじめ	出現
c	おわり	機能
d	3	火を中
e	おわり	わった
f		た

知技	2
風刺表	9
主体的	9

	3
	18
	21

	8
	10
	20

	9
	4
	10

	12
	20
	10

	2
	3
	0

	20
	0
	0

点